こどもんせんす

江藤 淳

ことんせんす

江藤 淳

北洋社

著者略歴

1933年東京生れ。慶応大学英文科卒業。文芸評論家。東京工業大学教授。「季刊藝術」編集同人。

著書　『夏目漱石』『奴隷の思想を排す』『作家は行動する』『海賊の唄』『作家論』『日附のある文章』『小林秀雄』（新潮社文学賞）『西洋の影』『文芸時評』『アメリカと私』『犬と私』『続文芸時評』『成熟と喪失』『崩壊からの創造』『考えるよろこび』『漱石とその時代』（菊池寛賞）（野間文芸賞）『旅の話・犬の夢』『夜の紅茶』『アメリカ再訪』『一族再会』『批評家の気儘な散歩』『文学と私・戦後と私』『海舟余波』『フロラ・フロラアヌと少年の物語』『決定版夏目漱石』『漱石とアーサー王傳説』『続こもんせんす』他に『江藤淳著作集』（全6巻）『続江藤淳著作集』（全5巻）『江藤淳全対話』（全4巻）がある。

こもんせんす

一九七五年一月十五日　第一刷発行
一九七五年十二月十日　第六刷発行

著者　江藤淳

発行者　伊藤金吾

発行所　北洋社
東京都千代田区富士見二―二―一
電話（二六四）〇五五一　〒一〇二
振替　東京一三三二四三

印刷所　精興社

製本所　牧製本

乱丁・落丁本はおとりかえいたします
© Jun Eto 1975

目次

I

三木さんとタオさん　11
お盆のラッシュ　17
「終末論」さわぎ　22
ヒットラー・ブーム　27
海舟ブーム　32
はらはら、ぼんやり　37
遊びをせんとや……金狂い？　42
性悪説のすすめ　48
サイレント漫画　54
〝サマリア人（びと）〟たち　60
梅雨（つゆ）の周辺　65

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

II

結婚披露宴の話 73
〝世紀末〟の復活？ 79
天才を見た 85
英語になった『三四郎』 90
岩田専太郎の女 95
出て来るわ、出て来るわ……101
江崎博士の帰国 107
〝アール・レトロ〟 113
モナ・リザ　上野　フランス 118
本のたたずまい 124
野球を聴いたころ 130

Ⅲ
スキー列車の怪　137
国鉄八方ふさがり　142
減点パパ　147
佐賀人気質　152
五月来る　158
ホテルという名の文化　163
夏休みの効用　168
美空ひばりの歌　173
Ⅳ
大豆と哲学　181
資源戦争と〝民力休養〟　187
落葉の音　193

集団狐憑き　198
〝ふとしたることにあわてて年の暮〟　203
天下大乱の年？　209
鈍感と怨恨　214
異常乾燥　219
春闘疲れ　225
V
政治家の防音装置　233
尊皇攘夷　238
政治と言葉　243
明治天皇と周恩来　248
金のつかいかた、教えます　254
第二の〝終戦直後〟　259

日本的交渉法　264
闇屋ふたたび　269
戦々兢々（きょうきょう）　275
信頼されない日本人　281
＊
時代の切れ目　287
あとがき　292

装幀　著者自装
題字　佐野繁次郎

こもん　せんす

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

三木さんとタオさん

日航機のハイジャック事件が起きた日に、たまたま乗った個人タクシーの運転手が、
「なんだってこんなに騒ぐんだろうね」
というんですよ。
「だいたいヨーロッパあたりに行って、物見遊山をしたり、みやげものを買って来たりできる連中は、それだけでもしあわせな連中だ。この暑いさなかに、どこにも行けずにかけずりまわって働いている人間のほうが、くらべてみればはるかに数は多いはずだ。そうじゃありませんかね、旦那」
というから、
「そりゃそうだね」
といったんです。
「それなら、なんでそういうあたしたちが、こうやってラジオをつけるたびに、ハイジャック、ハイジャックというのを聴かされて、お付き合いをさせられなきゃならないんですかね」
と、その運転手はいうんです。

そういわれてみれば、なるほどそうですな。たしかにテレビをつけても、ラジオをつけても、新聞をひろげても、いたるところハイジャックで埋めつくされている。もちろん、当事者にとっては大変なことで、百何十人だかの生命がかかっているのだから、騒ぐ理屈はわかるけれども、なにも世界があの事件だけで占領されているわけじゃない。ハイジャックで目隠しされているうちに、どこでどんなことがおこなわれているか知れたものではない。どうして、もう少しバランスのとれた報道をしないのだろうと思いましたね。

ところで、最近もう一つ、奇妙きてれつな事件があった。それは、ミンダナオ島に日本兵が隠れていたという誤報です。

面白いというか、お気の毒というか、もちろん肉親の方々にはお気の毒というほかありませんけれどもね。みんなが日本兵だ、日本兵だと騒いだあげくの果に、実はこの元日本兵三木慮二さんと書き立てられた人は、タナオ・タオさんという現地の人で、日本兵ではないことがわかった。お父さんが日本人、お母さんが現地人という混血児だった。

誰が最初にいい出したのか知らないけれども、この人が日本兵だったという前提で、それまでのあいだにずいぶんいろいろな記事が出た。なかでも傑作だったのは、ある新聞社の特派員が、その社で発行している週刊誌に書いた「日本人で〝ありたくなかった〟三木さんの30年」という文章です。これは、いま読むとまさに抱腹絶倒ですな。

この新聞記者氏は、何度となく夢を見た。なんの夢かというと、元日本兵が集落をつくって暮している夢だという。それも、牧場で人間を飼って、それを殺して食っている。つまり、人肉を食っ

て生存しているという夢なんですね。極度の飢えから、日本兵が人食い人種になり、人間を家畜のように飼って、その肉を食っているという幻想です。

どういう体験か知らないが、三木さんはあらゆる苦しい体験をした。人肉も食ったかも知れない。そのショックで記憶を失ったのかも知れない。風土病にかかったこともあって、記憶はなおあいまいになった。いまや心の旅路の帰途についているけれども、自分が日本人であったことをいまだに恐しいことのように思い、望郷の念をおさえて、日本人に戻ることをほとんどあきらめている。日本人でありながら、それを自分で認めることを拒絶する。これは日本人に対する痛烈な皮肉ではなかろうか、と記者氏はいっている。

堂々たる大ルポルタージュですが、前提となる事実が間違っているんだから、話にならない。タオさんイクォール三木さんならともかくも、タオさんは三木さんとは別人だったのだから、これはとんだお笑い種です。

よく読んでみると、この記事のなかですら、タオさんは自分が三木さんであるとは一言もいっていない。

「ソウゾウ・ミキは私を弟と思い込んでいる。それならほかの兄弟を呼んできて私に会わせればよい。みんながリョウジ・ミキだというなら、私はそうなのだろう。みんなが違うといえば、それは私にとってきわめて簡単なことになる」

三十年前に別れた弟恋しさのあまり、自分を弟だと思いたい気持はわからないでもない。自分に会って満足するのなら、会ってもよい。違うというなら、事実違うんだから、話はきわめて簡単な

ことだ。タオさんはこういいたかったのでしょう。

それからもうひとつ、タオさんは、

「私は家族とともにフィリピン人として生きる」

とも、はっきりいっている。

基礎になる事実は、この二つの証言だけです。あとはすべて新聞記者の幻想、もしくは妄想にすぎないのだから、空恐しくなる。わたしには、人肉をどうとかしたとかいうことよりも、この種の妄想のほうがずっと恐しいですな。しかも、それがマスコミに乗って撒き散されると思うと、身の毛がよだつ思いがする。

ひるがえって、この記者氏の発想を検討してみると、この人は、おそらく日本人というものは窮すれば人肉を食うような残酷な人間だと思いこんでいて、自分でも日本人でありたくないと思っているような精神構造の持主であろうと思われる。三木さん、実はタオさん事件の提起した最大の問題は、マスコミの一部に潜在しているこういう奇妙な思いこみ方の問題ではないでしょうかね。

つまり、日本人であることに対する奇妙なうしろめたさがマスコミのどこかにただよっていて、折にふれて表面に出てくるという現象です。記者がこの種の心情にとらわれていると、事実をそっちのけにして、ついつい感情でふくらました記事を書いてしまう。

「戦後三十年近くをフィリピンで過し、突然、ひょっこりとわれわれの目の前に現れた元日本兵という劇的な筋書とはおよそ裏腹な、たんたんとした表情の三木さんだった」

「たんたんと」しているはずでさあね、もともと日本兵じゃないんだから。当人だってキツネにつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com